

## 第 21 回「孔子像（一）」

\*\*\*

孔子の生涯とその時代と。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 21 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「孔子像」第一回をお話しします。

「孔子伝」ではありません。孔子の一生「孔子伝」につきましては、テキスト『論語のこころ』第十二章の「孔子の生涯とその時代と」に詳しく描かれておりますので、それをお読みください。

孔子の一生の中で、様々な重要な出来事がありますけれども、その中で生まれてきたものが「孔子像」。あるイメージです。まず有名な文章を読んでみましょう。これは大体、皆さんは高等学校で学ばれたかと思います。

「子曰く、吾<sup>われ</sup>十<sup>じゅう</sup>有五<sup>ゆうご</sup>にして学<sup>がく</sup>に志<sup>こころざ</sup>す。三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>にして立つ<sup>た</sup>。

四<sup>し</sup>十<sup>じゅう</sup>にして惑<sup>まど</sup>わず。五<sup>ご</sup>十<sup>じゅう</sup>にして天<sup>てん</sup>命<sup>めい</sup>を知<sup>し</sup>る。六<sup>ろく</sup>十<sup>じゅう</sup>にして耳<sup>みみ</sup>順<sup>したが</sup>う。

七<sup>しち</sup>十<sup>じゅう</sup>にして心<sup>こころ</sup>の欲<sup>ほつ</sup>する所<sup>ところ</sup>に從<sup>したが</sup>いて矩<sup>のり</sup>を躓<sup>こ</sup>えず」(為政第二)

もちろんこれは、晩年になって、孔子が70歳を越えてから己の一生を省みて述べたことばです。孔子は73歳、または74歳で亡くなりましたから、本当に晩年のことばです。しかもこの、10年おきのこの出来事が孔子の一生の中で、重要な意味を持つ区切りでもありました。

解釈していきましょう。

「子曰く」

孔子のことばですね。

「吾 十有五にして学に志す」

十五歳のときに学問を志すことを決めた。本当はもっと前から、孔子は勉強しています。

孔子のおかあさんは、ある祈祷集団、拝むことを職業にしていた集団の人です。私の推測するところ、孔子は生まれてしばらくその集団にいたと思われます。

おとうさんは農民です。農民と祈禱師の関係ですから、どうも同居してはいなかったようです。おかあさんのいる祈禱集団で暮らし、しばらくして、父親の下で、農民として働くようになったと、そう考えられます。子どもの時に、祈禱集団の中で学んだことがあります。それは文字です。やはり祈禱師集団は文字を使いますので、覚えたのでしょう。これが孔子の武器になります。

普通の農民の家に生まれますと、文字は必要ありません。働くことが大事ですから、文字を覚えることに重きは置かれておりませんし、知りません。

ところが、孔子はたまたま、そういう生まれでありましたので、文字を知った。これが後に、孔子を、この文字を生かす道に導いていきます。

「学」はいわゆる文字のレベルではなく、人間として立つための学問です。

ただし、孔子の村には、それを教える人がいたかどうか、わかりません。記録もありません。村の長老あたりから、学んだのでしょう。そのあたりから、孔子は学問を志したのでしょう。ですから、十五歳で初めて文字などを学んだというわけではありません。

自分は、人生を学び、自分を鍛える、そんな生き方をするのだと志したということです。

「三十にして立つ」

これは三十歳で自信を持ったということでもあります。

やはりその時代、農民からすぐ世に出ることはできません。孔子は村役人になったり、いろいろな仕事をして、次第に、あの男はなかなかの者だと、評判を得ていきます。この頃は殿様の済む国都とは関係ありません。まして、王が住む王都とはまったく関係がありません。農民でした。それがだんだんと頭角を現してきたのでしょう。孔子はおかあさんが属していた「儒」という集団の中で育ちましたから、いろいろなことについて、便利な男でした。

三十歳になると、孔子は、皆の評判となったある形をつくります。孔子の家を使った塾です。その頃には弟子も若干おりました。子路などです。三十歳で自信を持ち、世に出ていこうと思った。

ところが、孔子は大問題にぶつかりました。国の政事を目指しながら、残念なことに、孔子には、高度の政事的知識がまだありませんでした。

国全体の政治には、特別な作法、特殊な知識というものがあります。今日でもそうです。

予算を組むと言っても、我々の家計簿のように簡単なものではありません。それでは世の中を動かさません。非常に複雑で細かいものです。ですから家計簿を見る程度の知識で、国家の財政を論じては物笑いの為です。

孔子はこれらいろいろなことを勉強するために都へ留学します。ハイレベルなものを勉強しようと思ったのです。

#### 【「<sup>じゅ</sup>儒」 という祈禱師集団】

孔子の母は祈禱師集団である「儒」にいました。孔子も幼い頃はその中で暮らし、文字や数字を覚えたのでしょう。

ここで「儒」について少しお話しします。

祈禱はあくまでも地方の人たちの必要とするものです。例えば、農民にとって大切なものは雨です。雨が降ってほしいということが望みです。つまり雨乞いをしてほしいということが重要なことだったのです。「儒」と言われる祈禱師集団は雨乞いをいつもしていたようです。

みなさん、バカバカしいとお思いになるのですが、実は意外と理に適っているのです。

雨乞いはことばを使ってするだけではないのです。あるところにおいて、火を焚くのです。

それは大体、谷あいです。ちょろちょろではなく、豪快に焚きます。煙が上り、温度の上昇した空気が上ります。そうしますと、それが上空をかきまわす。

雨乞いが必要な状況ですから、日照りが続いていたわけですから。上空のどこかに水はたまっているのです。そこへ、下から煙が上がって、かきまわすと、細かい水の粒同士がくっついて、雨が降り出す。そんなことがよくあるのです。ですから、祈禱師も場所を選んで行います。谷あいですと、煙も火も上へ垂直に上がります。一か所降り出しますと、連動して降り出します。

そういうことだったのです。祈禱師も案外、自然科学的などころがありました。

孔子はそのような集団の中で暮らしました。

話は孔子の三十代に戻ります。

彼は、三十から三十五歳くらいの頃でしょう。王のいる王都での留学を終え、高いレベルの政事における重要知識を学んで帰ってきます。

「四十にして惑わず」

彼は自信を持ちました。政治はこうあるべきだという自信です。祖国、魯の大きな街、国都の中で、孔子の塾は盛んになり、弟子も集まってくる。そして政治的発言もする。しかし、まだ仕官はしていません。民間にあって、政治を論じ始めます。すると、やはり目立ちます。

そこで、孔子の塾が有名になります。さらに弟子が集まってくる。

「四十にして惑わず」自信を持った。ますます弟子も集まってきます。孔子の学校が、華やかであつたことを想像できます。

「五十にして天命を知る」

我々は、天命を知るといって、何か、諦めると言うか、やや消極的な、後ろ向きな感じを抱きがちです。まったく違います。これは、もっと生き生きとした、自分に働き場所ができたという、そういう天命です。

天が、お前はこうしろと、命じているという意味の「天命を知る」です。

彼が正に世に出てきたということです。

事実、五十三、四歳頃ですが、祖国である魯の国の閣僚になります。大臣級です。そして実際、政事を握ります。

「五十にして天命を知る」世に出ていく、自分の位置する所を知ったということです。

ところが、五十四歳で閣僚になった孔子に、嫉妬をする者も多く、いろいろなことがありまして、

彼は失脚します。閣僚の場を離れざるを得なくなるのです。

そこで、孔子は、祖国で政事を行うことをあきらめて、他の国で自分の力を試してみようと、弟子を連れて旅に出ます。弟子を連れての旅といっても、少人数ではありません。数十人という集団でした。

自分を政治家として使ってくれと、いろいろな国を回ります。ですから寂しい旅ではありません。堂々としています。

「六十にして耳順う」

しかし流浪の旅の中では、様々なことがあったのでしょう。絶望することもあったでしょう。

その頃になって、人の意見を素直に聞くことができるようになったと、こう言っています。

孔子はかなり自我の強い人であったわけですから、六十になってから、やっと人の意見を聞くことができるようになったと。

我が強くなければ、これほどがんばれませんよ。しかし己を省みて、人の意見を聞くようになる。こういうことです。

六十代後半になって、七十近くになって、故郷に帰ってきます。これはもう、他国で自分の場所を求めても、叶わなかったからです。祖国で、今度は本格的に塾を経営するのです。

「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず」

七十歳になって、命ぜられたのではなく、自分が自然と行動して行って、それがきちんとルール

「矩」を越えることはなかった。自然と、在り方に従うことができたということです。

こうなってきたら、人間のすべてを超えていったという状況です。

さて、そこで、この間の孔子の気持ちを一つ申します。

ひとし  
「人知らずして<sup>いか</sup>慍らず」(学而第一)

孔子の人生というのは、これでありました。

他人が自分を認めてくれない。そのことに対して腹を立てない。怒らない。彼はそれをずっと持ち続けたようです。裏を返せば、彼は腹を立てたのですね。自分をなぜ認めてくれないんだと。

しかし、それを言うのは、人間として小さい。孔子は、認められなくても腹を立てないようにしようと、若い頃から堪えてきました。これが孔子像の一番基本になることです。

そこで、一つ参考までに。

孔子のこのことばは有名でありますから、たくさんの熟語が生まれました。

「吾 十有五にして学に志す」から、十五歳を「志学<sup>しがく</sup>」と言います。

「三十にして立つ」接続詞「而」を使って、「而立<sup>じりつ</sup>」（三十而立）。

「四十にして惑わず」四十は「不惑<sup>ふわく</sup>」。

「五十にして天命を知る」五十は「知命<sup>ちめい</sup>」。

「六十にして耳順う」六十は「耳順<sup>じじゆん</sup>」。

「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず」七十は「従心<sup>じゅうしん</sup>」と表します。

この「従心」ということばは、あまり世に知られておりませんで、「古稀<sup>こき</sup>」ということばが使われますね。しかし、これは孔子とまったく関係がありません。

ずっと後、唐の時代の、杜甫<sup>とほ</sup>という有名な詩人がおります。その詩人の詩「曲江詩<sup>きょくこうのし</sup>」の一句「人生七十古来稀<sup>じんせいしちじゅうこらいまれ</sup>」からきています。

さて、最後に申します。

### 【三つの孔子像】

孔子はこのようにして一生苦労しながら、常に努力をしてきました。

そういう「道徳家としての孔子像」がまず、第一。

その次は「生活者としての孔子」です。

道徳家ですが、夢みたいな考えを持っていただけではなく、彼には非常に現実的なところがあります。彼はふわふわとした観念的なことばで説くのではなく、現実の生活者として在ったということです。『論語』を読みますと、道徳としての孔子のほかに、「生活者としての孔子」もあったということがわかります。

最後に、「宗教者としての孔子」というイメージがあります。

幼い時は宗教集団の中で育っておりますから、その影響は大きいと考えざるを得ません。そしてシャーマン、靈魂を降ろす、神を呼ぶというような在り方と、孔子はどこかでつながっております。

「宗教者としての孔子」を見ないということであったなら、孔子全体を捉えることはできないと思います。

「道徳家としての孔子」「生活者としての孔子」「宗教者としての孔子」  
こういうものが混然として、孔子という人物が存在していました。

今回は「孔子像」の第一回をお話ししました。